

5 宇多・醍醐天皇の信任

この間に、宇多天皇がどんなに道真を信任しておられたかということ、いくつかのエピソードが伝わっている。とくに天皇が讓位されるにあたって、醍醐新帝に示された『寛平御遺誡』をみると、先ごろ皇太子を立てるさい、誰がよいかと考え悩んで相談したのは、ほかならぬ道真ただ一人であった、ということが書かれている。これは非常に重要な点であって、宇多天皇ご自身は、藤原氏と関係のない斑子女王（桓武天皇孫）という母后から生まれられたが、その天皇でも、当時は藤原氏の勢力を抑えきれない状態であった。

したがって、つぎの皇太子に誰を立てるかということ、非常に苦心を要したであろうが、それを、同じ藤原氏でも傍流に属する高藤の娘の胤子から生まれられた敦仁親王、つまり後の醍醐天皇が一番いい、という結論を出すにあたって、ひそかに道真一人と相談されたというのである。

もう一つ例をあげると、宇多天皇は父皇の崩御により若くして即位されたものの、幼いころから政治の方面よりも仏門に入りたいという気持が強く、在位中も、できれば早く譲位したいと考えておられたようである。

そこで、皇太子を決められた翌々年、このような重大事を、やはり道真一人に相談された。それに対して道真は、天子が地位を退かれることは、よほどの事情がなければなさるべきではないから、どうか考え直し頂きたいと諫めている。

ところが、その後一年あまりたってから、宇多天皇はどうも譲位されるらしいという噂が流れた。そこで天皇は、あわててふたたび道真を召され、どうしたらよいか意見を求められた。すると道真は、このような噂がひとたび広まってしまえば、今さら取り消そうとしてもかえって誤解を生むだけだから、すみやかに譲位なさるほかないのではないかと述べている。

このように道真は、皇太子を立てるとか、譲位の時期を選ぶというような、きわめて重要な問題に関して、唯一相談にあずかったのである。しかも、宇多天皇はつぎの帝に対する御遺誡のなかに、「菅原朝臣ハ朕ガ忠臣タルノミナラズ、新君ノ功臣ナリ」として記されている。

これは決してたんなる褒め言葉ではあるまい。道真は、宇多天皇の期待に応えて

蔵人頭などの要職を立派につとめた忠臣であることはいうまでもないが、そればかりではなくて、醍醐天皇の立太子にもまた即位にも直接相談にのってくれた功臣なのだから、その恩を決して忘れないようにという意味であろう。

この御遺誡を受け取られた醍醐新帝も、道真に敬意を払っておられたようである。とくに道真が大へん優れた学者であり、漢詩や和歌の名手であることをよく知っておられたので、その漢詩文集を献上するよう仰せられた。それに対して道真は、自分が学問で身を立て高い官位に就きえたのも「父祖ノ余慶」であるから、ぜひ祖父清公と父是善の詩文集もいっしょに献上させて頂きたいと申し出ている。

醍醐天皇は、その三代にわたる漢詩文集を御覧になって大そうお喜びになり、さっそくつぎのような詩を詠んでおられる。

門風ハ古ヨリコレ儒林、今日ノ文華ハ皆尽ク金ナリ。唯一聯ヲノミ詠ジテ氣
味ヲ知ラズ。況ンヤ三代ヲ連ネテ清吟ニ飽カンヤ。琢磨セル寒玉、声声麗シ。裁制
セル余霞、旬旬侵入。更ニ菅家ノ白様ニ勝レルコトアリ。コレヨリ抛チ却ツテ匣
ノ塵コソ深カラン。

この詩に出てくる「白様」とは『白氏文集』(八二四年成立)のことである。菅原氏三代の漢詩文集というのは、盛唐第一の詩人白楽天の詩文集よりも優れている、だから今後は従来愛読してきた『白氏文集』を匣のなかにしまいこみ、専ら菅原氏の漢詩文集を愛唱することになるだろう、という大へんなお誉めの御製である。これを見ても、宇多天皇はもちろんのこと、つぎの醍醐新帝も道真をいかに高く評価しておられたか、よくわかるであろう。